

科学史の批判的再検討から新しい哲学の創出へ

宇都宮大学提供
作成日 2016年2月2日
更新日



研究者氏名 たぐち たくみ 田口 卓臣	所属機関 宇都宮大学国際学 研究科	関連キーワード(複数可) フランス文学、西洋思想史、近世科学史、文理横断、カ タストロフィ、脱原発
主な研究テーマ ・18世紀フランスの文学、思想、科学 ・ヨーロッパ現代思想 ・脱原発の哲学		主な採択課題 ・若手研究(B)平成21～24年度(配分総額:2,210千円) 課題名「十八世紀フランスの思想と文学の相関関係」 ・若手研究(B)平成25～27年度(配分総額:1,690千円) 課題名「18世紀フランス思想における科学と文学:デイドロの 言説戦略の分析を起点として」

① 科研費による研究成果

- ・書籍出版3冊の成果をあげた。具体的には、(1)単著『デイドロ 限界の思考—小説に関する試論』(風間書房、2009年11月)、(2)単著『怪物的思考 近代思想の転覆者デイドロ』(講談社選書メチエ、2016年3月)、(3)共著『脱原発の哲学』(人文書院、2016年2月)の3冊である。
- ・(1)では、18世紀西洋を代表する思想家、ドニ・デイドロの思想が、小説作品の中で、どのように語られるのかを跡づけた。
- ・(2)では、科学史において「近代科学の基礎を築いた」とみなされてきたデイドロの作品を読み解くことで、「法則」を追求する科学のあり方に根源的な疑問を突きつけた彼の思想を明らかにした。
- ・(3)は、科学、技術、政治、経済、歴史、環境など、様々な学問分野から、原子力発電のシステムを分析し、批判した書物。筑波大学で教鞭をとる哲学研究者、佐藤嘉幸との共同作業で完成した。ただし、この成果は、基盤研究(C)「啓蒙期から現代に至るカタストロフィの思想と表彰に関する総合的研究」(代表:西山雄二 首都大学東京)の分担研究者としてあげた業績である。

② 当初予想していなかった意外な展開

- ・(1)は、読売新聞、日仏会館共催の学術賞、第27回渋沢・クローデル賞特別賞を受賞。読売新聞の取材を受け、文化面で特集されたほか、「日仏会館通信」、渋沢栄一財団の機関紙「青淵」、人文社会系の書評紙「週刊読書人」などで取り上げられた。
- ・(3)は、福島第一原発事故以降、脚光を浴びた元京都大学原子炉実験所助教、小出裕章氏、および、環境経済学者として著名な立命館大学教授、大島堅一氏より、本書を高く評価する推薦文が寄せられた。

③ 今後期待される波及効果、社会への還元など

- ・(3)は、日仏会館における国際シンポジウム(2016年4月)、「週刊読書人」における特集対談企画、いくつかの新聞における書評掲載などが決まっており、著名な知識人の推薦文が寄せられていることもあって、今後、社会的に注目を浴びると推定される。
- ・(2)は、(3)よりもより「理論」的な内容を含むが、近代科学の歴史に関する根源的な考察を施している点で、(3)と一対である。(3)が注目されることで、(2)の学術的意義にも注目が集まることが期待される。